

## 〈書評〉

宋連玉・金榮編著

## 『軍隊と性暴力——朝鮮半島の20世紀』

(現代史料出版 2010年 390頁 ISBN 978-4-87785-204-7 4,300円+税)

洪 玗伸



日本と韓国の間で朝鮮半島をめぐる歴史が、これほど多くの知識人、民間人、政府間の交流によって同時進行的に論議された時期があっただろうか。いわゆる「韓国併合100年」を迎えた2010年、日本でも市民団体や知識人グループが主催した様々な取り組みがあり、政府レベルにおいても韓国に向けての文化財返還や首相談話が相次いだ。しかしこれらの取り組みは、あくまでも日韓の枠組みのなかでのみ語られる傾向があった。2010年は、朝鮮半島の危機が最も高まった時期でもあった。そして、今、朝鮮半島で「軍隊」が動いている。

特に、2010年末に韓国の西海岸の民間人居住地に対する北朝鮮の発砲事件は、朝鮮半島があくまでも「休戦」状態であったことを改めて認識させる出来事であった。韓国では、北朝鮮を挑発することを懸念する世論を押し切って、韓国軍とその指揮権を持つ米軍との共同訓練が強化された。一方沖縄でも米軍訓練は一層強化され、辺野古への米軍基地移設問題も急速にエスカレートしている。いわゆる民主主義国家日本とアメリカで、何万人もの沖縄住民の反対声明よりも国家間の「合意」に基づく移設案が、従来にもまして強引に進められている。

このように朝鮮半島における「軍隊」の動きは、植民地朝鮮にやってきた「天皇の軍隊」、「解放」後朝鮮半島に駐屯した沖縄の米軍、朝鮮戦争に日本の米軍基地から飛んできたB29を記憶する人々に、「戦争の音」を想起させる。戦争に向かって軍隊が動く朝鮮半島において「植民地主義」は終わってないのである。本書が持つ重要さはまさにそこにある。本書の著者8人の「軍隊」と「性暴力」に対する問題認識は、「継続する植民地主義」を直視しているからである。それゆえ、今日を生きる私たちに具体的に「戦争の音」を認識するように促す。本書の編著者の一人宋連玉は次のように問題提起する。

戦争が戦場における性暴力を伴うものであることは、旧日本軍下の慰安婦問題においても、近くにはボスニアでの集団レイプでも確認してきたとおりであるが、日清戦争、農民革命鎮圧戦争、日露戦争、韓国併合戦争（抗日義兵闘争）と性暴力をつなぐ視点は十分とはいえない。日本における一般的な歴史認識において日清、日露戦争とはあたかも日本と清国、日本とロシアとの戦いのように受けとめられているが、両戦争とも朝鮮人の戦いを鎮圧する、朝鮮を戦場あるいは兵站基地とした戦争であったことは常識的な歴史認識となっていないからである。（本書、127項）

宋の言う「日本と清国」「日本とロシア」との間での兵站基地としてあり続けた朝鮮半島の歴史を、戦後分断された朝鮮半島、そして今も米軍の兵站基地としてありつづけている沖縄の現状とともに読み直す必要がある。今こそ「軍隊」のあり方が問われる時期である。

その点において本書が第1部に、北朝鮮を含む現地調査で、分断された南・北の軍事暴力の連鎖をつなげようとした、その試みを評価したい。

金榮と庵道由香（第1章）は、2003年、2005年、2008年の3度にわたり、北朝鮮の咸鏡北道の三つの都市を調査した。ソ連（ロシア）と中国の国境地帯であり植民地下の日本の朝鮮軍第19師団の軍事的要塞であった羅南、会寧、芳津である。金榮と庵道はこれらの地域に、日本軍の「遊郭」として使われた建物や日本式建築土台、将校がよく利用したという飲み屋の跡地が残っていたことを確認している。証言調査を通して浮き彫りにされたこれらの「遊郭」の実態は、「慰安所」システムと多くの共通点を持っていた。また、芳津では軍「慰安所」建物も確認している。膠着状況にある日朝関係を考えれば、本書で出会う北朝鮮証言者の肉声は貴重である。

一方、金富子（第2章）は現在、韓国の軍事都市群山の現地調査を行っている。群山は、植民地時代は収奪商業都市として日本によって開発された「遊郭」地から、解放後は国連・米軍の性売買地区「基地村」へ、そこからまた韓国男性の「性売買集結地」にされた軍事都市である。金富子は、こうした群山の歴史を分析するにあたって、韓国社会で最も疎外されてきた基地村女性のライフストーリーを中心に位置づけることを忘れない。群山アメリカタウン・基地村女性出身の最初の運動家としてインタビューを受けた金連子のライフヒストリーは植民地時代から続く群山における軍事暴力と性暴力の連鎖を問う重要な糸口となっている。

今韓国では元日本軍「慰安婦」女性たちが今度は運動家として、基地村での体験を持つ女性たちの痛みを分かち合おうと交流を始めている。具体的な軍事都市の歴史を、日本軍「慰安婦」と「基地村」女性のライフストーリーを繋ぐことで分析する研究は、今後、最も重要となろう。

第1部で実証的に言及した朝鮮半島における「遊郭」と「慰安所」の連鎖について学術的な説明を行っているのが第2部の宋連玉（第3章）の論稿である。宋連玉は、植民地支配の過程で朝鮮に導入された日本式「遊郭」が、一貫して軍司令部の意向が強く働いた「軍事占領地型」の管理売春、売春業者の「経営型公娼制」であり、日本内地と異なる「植民地型公娼制」が並存して展開されたことを論じる。日本「内地」と同じ「遊郭」という名称を使うことで混乱や誤解を生んでいる現状を指摘し、植民地地域によっては初期から軍「慰安所的遊郭」が存在したことを明らかにしている。なお、第2部では、辛珠柏（第4章）の論稿を通し、1882年から1945年まで朝鮮半島に駐屯し、韓国駐劄軍、朝鮮駐劄軍、朝鮮軍と変遷してきた「天皇の軍隊」の歴史の全貌を概観でき、兵站基地へと変質してゆく朝鮮半島の実態が把握できる。

こうした性管理システムに抗する民衆の動きがなかったわけではない。第3部では、植民地支配、米軍政、朝鮮戦争、軍事独裁を経て「軍事化」が繰り返された朝鮮半島で、セクシュアリティをめぐる様々な論議が、いかに、屈折・タブー視・抑圧されてきたのかを様々な角度から分析している。

第6章で宋連玉が目にするのは、植民地期における「廢娼運動」の挫折および米軍占領初期における「廢娼運動」の挫折である。「解放直後」の混乱期において、社会構造的な問題を直視し貧困女性の救済を含む「廢娼運動」に取り組んだのが、左翼の女性たちであった。米軍政は、左翼女性に代わって「婦女局」のエリート女性たちを「解放空間」における女性運動の担い手とした。自ら植民地政策に加担した前歴を持つ「婦女局」の女性たちには、貧困や社会構造により性売買を強いられる構造は見え、性売買を啓蒙の対象とした。目にみえる38度線の南北分断以前に、米軍政のもとで女性たちの間に分断線は引かれ始めていたのである。そして米軍に「慰安」を提供した女性たちは、「UN（国連軍）マダム」「UN慰安婦」「洋公主」<sup>1</sup>などと呼ばれ蔑視の対象となった。宋連玉は「廢娼運動」の系譜を綿密に分析することで、「売春」女性に一方向的に倫理的責任を転嫁する認識を単なる家父長制

や韓国内部の文化的な解釈で探る傾向の危うさに警鐘を鳴らす。

林博文（第5章）は、アメリカが、38度線以南に沖縄戦を経験し沖縄に駐屯していた第24軍団（軍団長ジョージ・R・ホッジ中将）を送り込んだ事実から議論を展開している。1950年6月に朝鮮戦争が勃発すると、日本に駐留していた第8軍が直に朝鮮半島に送り込まれた。沖縄戦研究者でもある林は、沖縄・日本・朝鮮半島をつなげる観点から、新たに発掘した原資料をもとに米軍の性管理政策と米軍兵士による性暴力問題を取り上げ、朝鮮戦争の実態を分析する。

一方、金貴玉（第7章）は、朝鮮戦争期に日本軍を模倣して韓国軍が「慰安婦」制度を創設させたことを明らかにした。2002年にこの事実を放送メディアや新聞で発表して以来、金貴玉の研究は、韓国社会において一貫したタブーの対象となっている。実際韓国では、朝鮮戦争に関する自由な研究がはじまったのは軍事政権以降であるが、いまだに一般の認識は冷戦構造を超えていないのが現状である。金貴玉は、日本の軍隊を体験した韓国の男性が同じ制度を朝鮮戦争に導入したことが、日本軍「慰安婦」の存在を知りながらも韓国社会でそれが長い間タブーとされたことと無縁ではないことを指摘している。自国の軍隊により「慰安婦」とされた女性たちは、いまだに沈黙を強いられている。こうした韓国軍「慰安婦」の沈黙は、アジア太平洋戦争期における日本人「慰安婦」の沈黙と同時に考える必要がある。軍事主義に染まった社会において、「自国」の軍隊に性を提供する女性たちは常に沈黙を強いられるのである。

山下英愛（第8章）は、朝鮮戦争後も続いた韓国の軍事独裁と「性売買政策」を研究し、韓国社会における軍事主義について論じる。「性売買」を巡る取締法とジェンダー意識を整理し、最新の性売買関連法までの過程の全貌とその意義を述べる。

以上詳しく見てきたように、本書は確かに、20世紀の朝鮮半島という空間を対象にしている。しかし本書で一貫して問うている問題認識は、100年前の8月に「韓国併合」条約が結ばれたことでも、1945年8月15日朝鮮が「解放」されたことでもない。また、それからわずか3年後の1948年8月15日、38線以南のみの総選挙と単独政府が創建され「制度的」な分断状況が始まり、続く朝鮮戦争で分断が固定化してしまっただけでもない。「軍隊」と「性暴力」を中心に朝鮮半島の歴史に迫る本書には、むしろ、いずれの8月15日においても忘れられた日本軍「慰安婦」という存在や、金学順という実名で初めて元「慰安婦」が自らの尊厳の回復を訴えた1991年8月の出来事こそが、問題認識の要諦となっている。金学順は、「国家たるもの」のあり方や性暴力の加害性を隠ぺいしてきた20世紀の歴史を、折り重なっている痛みを具体的に表現することで裁こうとした。そしてその問いかけは、朝鮮半島に留まらないことを本書は、ジェンダー視点を持つ日・韓・在日の著者によって歴史的に分析している。

戦争は性暴力が伴うものであり続けている。しかし、その事実をむしろ利用し、「性」を管理する軍隊のあり方は、「東洋平和」「東アジアの安全」などの美化した言葉をもって戦争が体現してきた「国家たるもの」のあり方の虚無性と共に語らなければならない。その虚無性に向かって歴史を直視し、そのことを適切な言葉で表現する歴史的な責任が、言葉を通して思考する社会的・政治的な存在である人間には問われているのではなからうか。まさに進行中の戦場の足音を耳にしている今、これらの状況に対する歴史的な責任そのものを免罪し安心感を漂わせる「和解」という語は美しすぎる。「植民地主義」問題を見据えつつ「軍隊」と「性暴力」を論じ、適切に表現する言葉を探る思想書として、本書の一読を勧めたい。

(ほん・ゆんしん／早稲田大学研究機構国際言語文化所客員研究員)

## 注

- 1 文字通りの意味は「西洋のお姫様」だが、米軍相手の性労働者を指す。